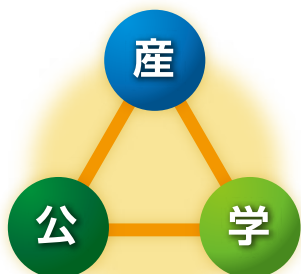


産学公連携コーディネータに聞く

中小企業の技術開発や製品開発の過程でさまざまなサポートをする都産技研の「産学公連携コーディネータ」。日頃受ける相談や、サポート内容の実際をご紹介します。



朝比奈 奎一 コーディネータ

多摩テクノプラザ



Profile

都産技研の前身である都立工業技術センターで19年間研究員として従事した後、平成24年3月まで都立の高専で22年間教鞭を執る。平成24年4月より産学公連携コーディネータとして旧知の都産技研に復帰するも、相談回数はすでに90回ほどに上る。前職で培った人脈をフルに活用して、積極的に相談に乗る日々。

朝比奈CDの担当曜日
毎週月曜日9時~17時

中小企業の課題に対して、どのように解決への道筋を付けるかアドバイス

中小企業の方は学びに対して敷居が高いと思うのでしょうか、学問的な相談を遠慮するところがありましたね。それを何とかしようと、都立高専の教員時代、中小企業向けに夜学を立ち上げたこともありました。大田区がバックアップしてくれたのですが、その時の人脈が生きていて、今も大田区を通じて相談があります。

相談に来てくださった企業が困っていたら、どうやって課題解決の道筋を付けるのかをアドバイスするのがコーディネータの仕事だと思っています。課題解決を意識したストーリーづくりは研究においてもやっていました。経営やマネジメントの課題に遭遇することもありました。中小企業診断士の資格を取ったのも、そうしたニーズに応えなかったからです。

産学の連携というと、企業が大学に頭を下げるというイメージがあるかもしれませんが

が、大学の先生もアイデアを実際に形にしてくれるところを探しています。そうしたニーズを今後も掘り起こしたい。多摩地区には国立の高専もあるし大学も多いので、宣伝して回るといいかなと思っています。

昔はどうすれば難削材を加工できるかなど固有技術に関する相談が多かったのですが、現在は「ものづくりと情報を結びつけるにはどうしたら良いか」など、複合化された課題の相談が多くなっています。それらの課題解決に道筋を付けられるのも、我々コーディネータの経験が物を言います。今までの経験を生かした産産連携のコーディネータも多く行っていて、実際のマッチングに成功した例もあります。

今後は高専と企業との共同研究も実現させたい。高専も企業のニーズを知る機会になり、企業・高専両者のニーズとメリットが一致する点でも有効だと思うのです。

●事例紹介 A社の場合〔産産連携の例〕

A社は、美容・健康器具の会社。自社でデザインも行っていますが、実際のものづくりは、金型設計から成型までを中国に発注して全てお任せの状態。そのため、ものづくりの実際をほとんど知らず、危機感を持つようになりました。

相談→共同研究までの経緯

- A社「まずは“ものづくり”について知りたい」 「金型をどのようにつくるか」、「どのような金型が作りやすいか」などを知りたい。

A社 「金型について理解すれば、“この形を変えれば作りやすい金型ができる”といったデザインもできるようになる」

朝比奈CD 「B社社長のように会社を経営し、なおかつものづくりをしている人なら相談に乗ってくれるのでは…と考えてこの会社に相談しました」



- 朝比奈CD、金型の設計・製造のB社を紹介 A社の社長の話を聞いた上で、高専時代の人脈を活用して紹介。
- A社とB社の金型設計・製造の産産連携が進行中 社員教育も含めて、社内のエンジニアリング部門強化を進行中。

Message 中小企業の皆さんへ



私の専門分野は生産技術や機械設計ですが、今は技術分野で単純に分類できる課題は少ないですし、実際に複合的かつさまざまな課題の相談に乗っています。連携がうまくいかないかも…と二の足を踏んでいるケースもあるかもしれませんが、多くの人とのコミュニケーションを取るだけで思いも寄らぬアイデアが生まれたり、技術に理論的な裏付けを得たり、メリットがあると思いますよ。さまざまな人をご紹介しますことで問題解決の場をつくりたいと思いますので、ぜひお気軽に何でもご相談ください。お待ちしております。